



止まない雫

たえなかず

第五四回短歌研究新人賞予選通過作品

二〇一・八・二二

愛ほどに減っても淋しくないほどに緑青の無いコイン輝く

キスもせず夏はうららと我愛でる ヴェジタリアンと密かに呼びぬ

憧憬は坂駆け降りてビリジアン 地平線だけ描いて欲しいの

夕映えが早く来そうな二階席 隅に居るからキスは弱めに

透明な傘差せば晴れ「みずひかり」という文字おもう泣き暮れるまで

野苺のソーダ吸上げニの腕の傷真あたらし悪女と言えど

夏が嫌い思ひ出すから薄氷うすらいに似たアンティークピアス弾いて

ねえわたし夏子と言う名がよかつたと冬の林檎に打ち明けてみる

沈黙のちに水面光りたり 記憶ではない乱視の世界

美意識の破片散らせる年下の男の腕をじっと見ている



グラス傾ければきらめきすぎる嘘 黒の服しか着ない誘惑

二十代なんて追憶二番目に高いルームのボタン叩けば

さんずいは私のこころ 海と河にて目深に帽子かぶりて

標識も傾斜している「起伏あり」 絵画のなかの海静止せり



純愛は静かにおわる白魚に鱗はありて 透けているけど

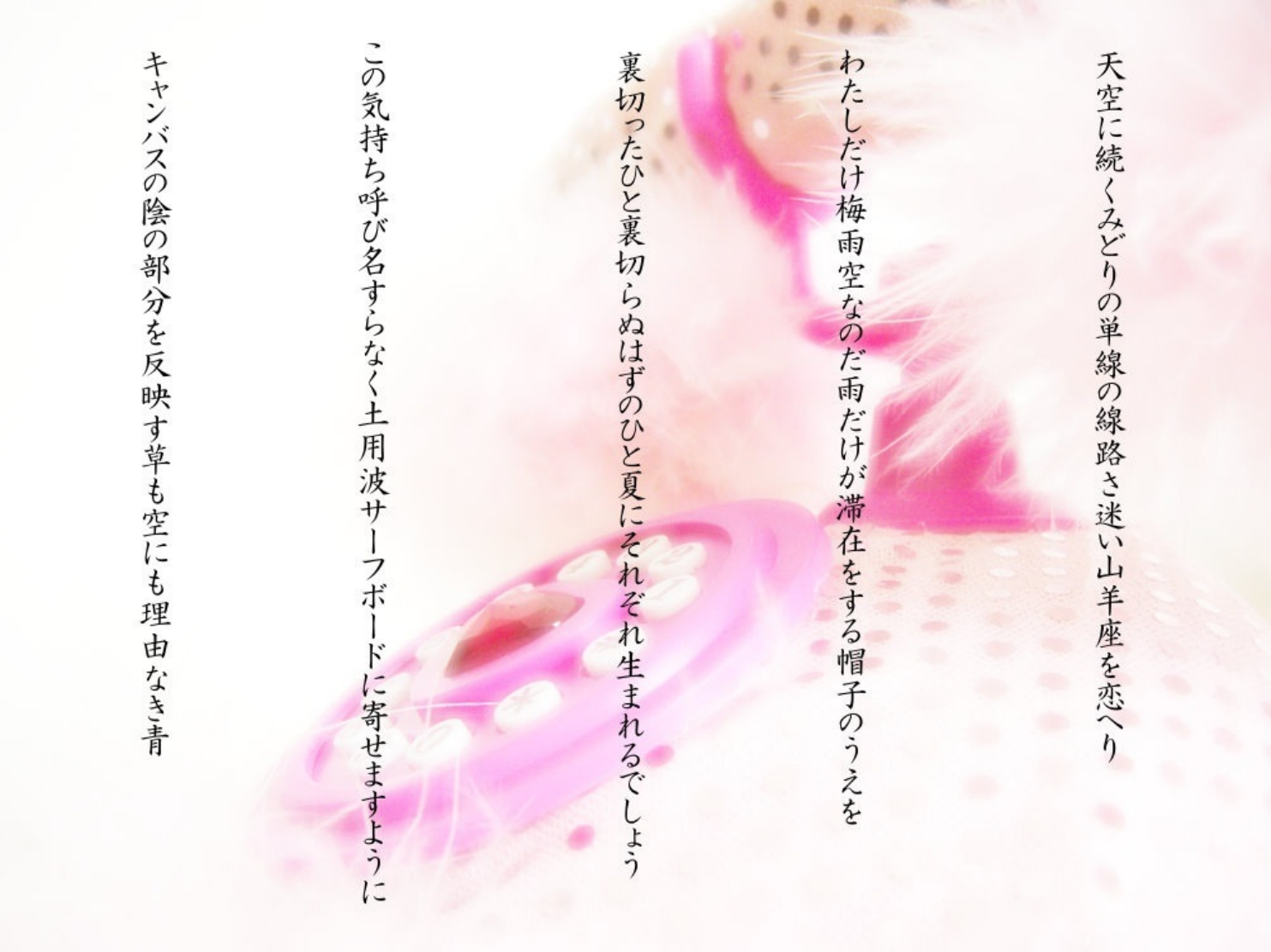
鉄棒に腰掛けハッピー・バースデーそんなひかりを過去に生んだよ

永遠がほしくてキスは親水性 なじんだころに吸い出すカノン

カプチーノ頼むその目でなんでって追い詰めないで泡にかくれて

きみという画風を誇張するように降り出す雨の海岸道路

ありつたけからだの水が照り返すなんでそんなに静かなんだよ



天空に続くみどりの単線の線路さ迷い山羊座を恋へり

わたしだけ梅雨空なのだ雨だけが滞在をする帽子のうえを

裏切ったひと裏切らぬはずのひと夏にそれぞれ生まれるでしょう

この気持ち呼び名すらなく土用波サーフボードに寄せますように

キャンパスの陰の部分を反映す草も空にも理由なき青

似た曲がかかる ロングのスリットが深いほどいい恋愛できない

「終点は久里浜行き」のアナウンスふたりきみしい帰化植物ね

この気持ち呼び名すらなく土用波サーフボードに寄せますように

八度ある熱は拡がり夏服の皺に似た波順繰りに来る

思い出の海はそこまで 満ちないでじゅうぶんすぎる止まない雫